

青年期における居場所感が自尊感情および 大学適応感に与える影響

○橋本博文^{1,2}・井宮武あゆみ¹・井池内はるか¹

(¹安田女子大学心理学部心理学科・²安田女子大学発達・臨床心理研究所)

目的

現代日本社会を生きる若者たちの心理を捉える上で、「場」あるいは「場」の主観的な理解である「居場所感」は、その理解のための鍵となる概念の一つであろう。「場」の喪失の中に日本の若者たちの生き方を捉える社会学者メアリー・ブリントンは、学校や職場という「場」の崩壊が、近年の日本の若者が抱える心理・社会的問題と密接に関わっている事実を示している (Brinton, 2008)。また心理学の研究においても、「居場所感」を感じられることが社会や教育現場における適応・不適応に強く働きかける事実が明らかにされている (例えば、石本 (2010) など)。本研究の目的は、青年期における居場所感の効果の頑健性を確認するとともに、自尊感情および大学適応感に着目するかたちで、居場所感の効果を二つの基準から検討することにある。具体的には、個人基準 (他者との比較ではなく自らの基準に照らして評価する基準) と、社会基準 (他者との比較を通じた評価基準) の二つの基準をもとに、居場所感と自尊感情および大学適応感の関連を分析する。

方法

調査対象者 広島県内の女子大学生 202 名 (平均年齢 20.1 歳) を対象に質問紙調査を行った。

質問紙の内容 質問紙には、1) 居場所感尺度、2) 自尊感情尺度、そして 3) (大学への) 適応感尺度を含めた。居場所感尺度については、石本 (2010) を参照に、「ありのままにいられる」という居場所感を測定する項目としての「本来感」、そして「役に立っていると思える」という居場所感を測定する「自己有用感」の二側面から居場所感の測定を試みた。自尊感情尺度としては、著者ら (橋本ら, 2016) が現在その開発を進めている個人的および社会的自尊心尺度を用いた。適応感尺度については、大久保 (2005) の尺度を大学における適応感の測定を目的とする尺度として用いた。

結果

各尺度の信頼性係数 居場所感尺度は先行研究にならない二因子モデルを採用した (本来感: $\alpha = .90$,

自己有用感: $\alpha = .86$)。自尊感情尺度についても、探索的因子分析の結果にもとづき二因子モデルを採用した (個人的自尊感情: $\alpha = .62$, 社会的自尊感情: $\alpha = .84$)。適応感尺度も、先行研究にならない四因子モデルを採用した (居心地の良さの感覚: $\alpha = .95$, 課題・目的の存在: $\alpha = .87$, 被信頼・受容感: $\alpha = .89$, 劣等感の無さ: $\alpha = .75$)。

居場所感と自尊感情の関連 本来感と自己有用感を独立変数、個人的自尊感情を従属変数とする重回帰分析の結果は、本来感のみが個人的自尊感情に対して正の効果を持つことを示していた ($\beta = .26$, $p < .01$)。一方、社会的自尊感情を従属変数とする同様の分析の結果は、自己有用感のみが社会的自尊感情に対して正の効果を持つことを示していた ($\beta = .57$, $p < .001$)。

居場所感と大学における適応感の関連 居場所感 (本来感・自己有用感) を独立変数、適応感各種を従属変数とする重回帰分析の結果は、まず被信頼・受容感に対してのみ自己有用感が正の効果 ($\beta = .65$, $p < .001$) を持つことを示していた。一方で、その他の適応感指標 (居心地の良さの感覚、課題・目的の存在、劣等感の無さ) に対しては、いずれも本来感の正の効果が顕著に示されていた (β s = .57, .47, .30, $ps < .001$)。

考察

本研究では、個人基準と社会基準の二つの基準に焦点を合わせつつ、青年期における居場所感が自尊感情および大学適応感に与える影響について検討した。本研究の結果は、1) 自尊感情には弁別可能な二側面があり、個人的自尊感情には本来感としての居場所感のみが、そして社会的自尊感情には自己有用感としての居場所感のみが影響を与えていること、2) また大学における適応感に対しては全体として自己有用感よりも本来感としての居場所感の方がより強く影響を与えている可能性を示していた。本来感は社会基準というよりも個人基準による居場所感として理解すべきであり、その効果については、今後の追試を通して詳細に検討していく必要がある。